

27. A氏にとっての料理の意味—心理社会的側面からの検討—

橋本かよ子, 久保 原恵, 半田奈津子

(1 富岡地域医療事務組合公立富岡総合病院
PCU看護師)

【はじめに】 A 病院 PCU では「あなたらしく生きることを支えます」の理念に基づいた緩和ケアを提供している。その人らしく生きるとは、一般的に多くのがん患者が願う「苦痛がない」ということだけではなく、その人が何を大切に思っているかという心理・社会的側面が重要となる。そこで、A 氏にとっての料理の意味を考察することにより心理・社会的ケアを振り返った。【事例紹介】 A 氏, 50 歳代, 女性。夫・次男の 3 人暮らし。20XX-1 年 10 月婦人科疾患のため手術施行したが摘出ができず大網部分切除し、化学療法実施。20XX 年 2 月癌性腹膜炎による嘔気嘔吐・癌性疼痛あり、緩和ケアの方針で 4 月 PCU へ入院。食事は流動食を摂取していた。食後に嘔吐もあったが週末は外泊し家族と過ごしたいと希望した。外泊後は家で調理したケーキやピザ、煮物などを看護師に持ってきた。5 月初め一時退院したが再入院となり 5 月末永眠した。【心理・社会的側面へのケア】 看護師は家族や料理の話題に触れ、A 氏がどのような思いでいるのか傾聴した。A 氏の思いを家族に伝えるとともに、家族の思いを傾聴した。【結果・考察】 週末に外泊して家族と時間を過ごすことが A 氏にとって現実的な希望となった。自分は食べられないが家族のために料理をすることで妻や母としての役割を果たしたいという欲求があったと考える。また、外泊後に料理したものを看護師に持ってくることでその役割を認められたいという思いもあったと考える。一方で、夫や息子には甘えることができない A 氏にとって看護師は甘えられる存在であり、看護師につらさを出することで心の安定を図っていたと考える。【おわりに】 A 氏を通して、料理の意味を知る事がその人らしく生きることを支える第一歩であり、身体症状の緩和とともに心理・社会的側面からのケアも重要であると再認識できた。今後もその人にとって大切なものの意味を考えながらケアしていきたい。

28. 通過障害のある終末期がん患者の食への欲求に対する看護師の思い

茂木 翔子, 鈴木 雄大, 小川 千春

北爪 謙次, 大内 晴美

(群馬県立がんセンター 7 階東病棟)

【研究目的】 通過障害のある患者は、経口摂取することで誤嚥による肺炎や窒息の危険性が存在する。しかし、食への欲求が強い場合、通過困難と考えられる形態の物を摂取し、嘔吐や発熱を繰り返す事例に度々遭遇した。そこで、本研究では通過障害のある終末期患者の食への欲求に対して、看護師がどのような思いを抱いているのかを明らかにすることを目的とした。【対象】 消化器外科病棟に勤

務する看護師 12 名 【期間】 2014 年 8 月 5 日～12 日
【方法】 半構造的質問用紙によるアンケート調査を実施。意味内容を抽出しコード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化へと分類した。アンケートは個人が特定できないように倫理的配慮を行った。【結果】 65 コード、16 サブカテゴリー (以下 < > と示す)、5 カテゴリー (以下 < > と示す) が抽出された。《患者の意思尊重》《食べる事の楽しみ》《可能な限り患者の思いのままに》《病識や説明に対する理解度による食事提供》《経口摂取の限界》《食べる事での負担》《繰り返す指示不履行》《停食にする段階》《患者の食に関する葛藤》《食に対する欲求の共感・受容》《安全への影響の危惧》《看護師の戸惑い》《看護師の役割意識》《病識・通過障害の程度の確認》《窒息や誤嚥の回避》《現在の状況と危険性の説明》《食事摂取時の状況と誤嚥症状の確認》《他職種との連携》《看護援助に対する思い》《患者特性に対する困難さの経験》《言葉かけや援助に対する迷い・模索》 【考察】 看護師は、通過障害のある終末期がん患者の食への欲求に対して、共感・受容しながらも、危険を伴う欲求の充足と安全に対する影響の危惧という葛藤を抱いていた。これは、患者の意思尊重と安全を保持する看護師の役割意識が背景にあると推察された。

29. 最期まで家でと願う患者を支えるための家族看護

有江美奈子, 小笠原一夫, 福田 元子

京田亜由美 (緩和ケア診療所・いっぽ)

【はじめに】 終末期患者が愛する家族の側で最期を…と願うことは決して珍しいことではない。しかし家で看取るには家族の理解や支えが必要である。今回青年期の子供が母親の死に向き合うために、医療者がどのようなサポートが出来たのか、事例を通して振り返りたい。【方法】 診療記録等から情報を収集し分析した。倫理的配慮：遺族に研究発表について口頭で説明し承諾を得た。【結果】 A さんは胆管細胞癌の 40 歳代女性でシングルマザーであり、20 歳代前半の 2 人の息子達と同居していた。A さんは退院の時、最期まで家に居たい、息子達のために自分で料理がしたい、少しでも歩み寄りながら息子との時間を過ごしたいと希望していた。しかし、退院初日に長男から「病院に入院していれば良かったのに」「帰ってきたら死体が転がっているのは嫌だからな」と言われ強いショックを受けた。A さんは、「介護が必要になった時、息子達がどこまでしてくれるのか？ 動けなくなった時は入院した方が良いのか…」と不安が強かった。A さんの姉妹も息子達の気持ちが理解できずに、彼らに感情的になっていた。看護師は、息子達や A さんの姉妹に各々から話を聞くことで、それぞれの気持ちや家族の関係性を知ることが出来た。彼らの各々の思いを看護師が代弁することによって次第に息子達も母親の側に居る時間が増え、A さんは念願だった息子が作ったパスタを食べることも出来た。最期はセデーションとなったが、息子達を含む家族全員に囲まれて笑顔を見せた。そ

して息子達に囲まれながら看取りとなった。【考 察】
看護師は、理想の家族像を押し付けることなく、家族の歴史を尊重することが重要である。また、家族員それぞれの辛さ、予期悲嘆を受け止めたうえで、それぞれの想いを傾聴し、橋わたしをする役割がある。

〈座 談 会〉

司会：平山 功

(済生会前橋病院 緩和ケア内科部長)

原 真由美

(独立行政法人国立病院機構沼田病院 看護師)

テーマ：「終末期がん患者のいきがい」

出演：押本 直子

(伊勢崎市民病院 緩和ケア内科主任部長)

藤平 和吉

(群馬大医・附属病院・緩和ケアセンター)

萬田 緑平 (緩和ケア診療所・いっぽ 外科)

神宮 彩子 (済生会前橋病院 看護師)

蜂須賀純子 (独立行政法人国立病院機構

西群馬病院緩和ケア病棟看護師長)